

＜書を持って町へ出よう＞

甘木・朝倉「まちの駅」を訪ねて

手嶋隆行

福岡県のほぼ中央。福岡空港から車で約1時間南に下ったところに、甘木・朝倉という地域がある。ここは朝倉市・筑前町・東峰村の三市町村で構成されている。北と南はなだらかな山地にはさまれ、東から西にかけては筑後川に沿って緑の田園が広がっている。

日ざしがまぶしい初夏の一日。私はこの地域を訪ねた。目の前の水路には清らかな水が流れ、あたりをすがすがしい風が吹き抜けている。そんなのどかな空気につつまれたまちの、何の変哲もない普通の商店の入口に、黄色いのぼりが立っているのが目にとまる。

それがこの地域で「まちの駅」を示すサインである。

「まちの駅?」。多くの読者は道の駅と間違えて、こう尋ねるかもしれない。しかしまぎれもなく「まちの駅」である。道の駅とは違う。

まちの駅の多くは普通の商店だ。商店がまちを歩く人が気軽に休めるスペースを提供し、トイレを貸してあげている。また店の一角には情報ラックがあって、そこにそのまちの観光パンフレットやマップが並べられている。その取組が、まちの駅なのだ。道の駅のように、大きな建物を建設するハード事業ではない。

基本は既にあるものを「そのまんま」使うということ。トイレだって、休憩するための椅子やテーブルだって店にもともと備わっているものをお客さんに使ってもらっただけ。観光パンフレットやマップにしても役場がつくったものを置いているだけ。あとは店長や店員さんたちが「駅長さん」となって、笑顔でおもてなしをしてあげる。時にはそのまちの観光案内や歴史などを語ってあげる。たったそれだけで、もうそこは立派な「まちの休憩所」や「観光案内所」になる。お金はほとんどかからない。理屈もいらない。

もちろんまちの駅になるのは商店でなくても良い。ひとが気軽に訪れるところであれば、レストランであろうが、福祉施設であろうが、役場であろうが、やる気があれば誰だってどこだってなれるのが、まちの駅である。

まちの駅は東京のNPO法人地域交流センターにより地域連携の拠点として考案された*1。1997年度から山梨県、静岡県等において実験的にはじめられた当初は、主に市民ホールや図書館など公共施設がまちの駅になるという形で行われた。しかし行政主導で行う当初の取組はあまり進まなかった。

動きはじめたのは2001年。この福岡県甘木・朝倉地域でまちの駅がはじまってからである。仕掛け人の上野春樹さんは朝倉市観光協会*2(当時:甘木・朝倉広域観光協会)の常務。彼はまわりにくらべて有名

な観光地があるわけでもないこの甘木・朝倉に、何とか観光客を引き寄せる魅力をつくり出したかった。

「ここには何もないから」といって地域づくりをあきらめてしまう例がよくあるが、彼は違った。

「ここには何もないが、ひとはいる。ひとが輝けばまちも輝く」(ついでに彼のいちばんの口ぐせは「金がないなら知恵を出せ、知恵がないなら汗をかけ」)。

そこで、上野さんは役所の協力を得て「あなたの店もまちの駅になりませんか」と全戸にチラシを配布した。たちまち20の事業者が申し込んできた。まだまちの駅がまったく知られていない頃である。ある人は新しいことへの興味で、ある人は地域貢献への熱意を持って、またある人は宣伝になって来客が増えるかなという「下心」を持って。理由は様々だったが、とりあえず全部がまちの駅になった。

やがて興味本位の人も、下心の人も、やっているうちにまちの駅の魅力にはまっていった。普通に仕事をしながら、でもちょっとしたプラスアルファのおもてなしで、お客さんが喜んでくれる。その心地よさに惹かれていった。一年が経過し、翌年にはその数は45になった。ほとんどロコミでその翌年には50になった。そして今では64の駅長さんたちが、それぞれのまちで「輝いている」。

それを聞きつけて県内外から官民間問わず、視察団が続々とやってくるようになった。やがてここを手本として、「甘木・朝倉方式」のまちの駅が全国で動きはじめた。

当初は親元である地域交流センターからも「異端視」されていた民間主導のまちの駅が、甘木・朝倉の駅長さんたちひとりひとりの輝きにより、いつのまにか「スタンダード」となっていたのである。なお現在常設のまちの駅は全国700ヶ所を超えている。

説明が長くなったが、今私がいるのは朝倉市の中心部から車で20分ほど行ったところ。さきほどからあたりにはかすかに甘い香りが漂っている。香りのもととは小さな菓子店。菓子工場と店舗を兼ねた「あさくら堂」だ。黄色いのぼりが立っているここは、もちろんまちの駅であるが、菓子店だけに「菓子の駅」と名乗っている。中に入ってみよう。

店内はまちの駅らしく広い休憩スペースがあり、テーブルの上には隣の工場からのできたての菓子が試食用として並んでいる。またコーヒーマーカーには「自由にお飲みください」と張り紙がなされている。ここは福岡市から大分県日田市に抜ける国道沿いにあるが、そんな旅の途中に立ち寄ったお客さんにゆっくりと休んでもらいたいとの配慮である。

駅長の井福勝義さんはこの店の二代目。父親から店を譲り受けたとき、彼はここを地域のひとに喜んでもらえるような店にしたいと考えていたそう。そんな矢先

に出会ったのが、まちの駅。なんだかおもしろそうと、すぐに飛びついた。やがて近くにいくつもまちの駅があることに気づいた。そこで彼は他のまちの駅に呼びかけた。

「まちの駅つながりで、いっしょに餅つき大会をしましょう。せっかくなので、地域のひとや留学生も招待して」。

大成功であった。地域のひとに喜んでもらいたいという、彼の夢が実現したのだ。そして井福さんは、地元特産の富有柿を使ったお菓子を開発したり、とにかくこの地域が豊かになることが自分の幸せと思うようになった。

今、彼には次なる夢がある。いつかこの工場を広げて、子供からお年寄りまで楽しんでもらえるような、お菓子のテーマパークをつくることである。

続いて同じ朝倉市の「どらやきの駅」に行ってみる。「古賀乃屋」という、どらやきの専門店である。お店を営んでいるのは古賀三夫さんと博子さん。夫婦で「駅長さん」である。以前は甘木駅前で小さな和菓子店を開いていたのだが、数年前あるテレビ番組の企画でご主人の三夫さんが京都の老舗で修行するという模様が放送されてからは、お店が大繁盛。たくさんのお客さんが押し寄せて、周りの人々に迷惑をかけてしまいった。それで今の場所に新しい店を構えたそうだが、そのときのお詫びに何か地域のためになることができないか、そう思っまちの駅になったとのことである。

そんなふたりがまず心がけているのは、トイレを常にきれいにしておくこと。「この辺には公衆トイレがないから、皆さんにとっても喜んでいただいています」と三夫さん。

「今日は暑いからのどが渇くでしょう」と、博子さんが満面の笑みで冷たいお茶を出してくださった。水出し茶とあって実にまるやか。ちびりちびりといいただきながら、「まちの駅になってお客さんへの接し方が変わりましたか」と尋ねてみる。

「以前は自分の店のお客さんとして接客していましたが、まちの駅になってからは、この地域へのお客さんだとまず思うようになりました。皆さんにとって自分は地域の代表選手。だから恥ずかしくないようなおもてなしを心がけています」。と博子さん。

隣では三夫さんが真剣な表情でどらやきを焼いている。静かな店内にどらやきの焼ける音が時おり小さく「ジュ」と。香ばしい匂いとほのぼのとした空気が店内に満ちていた。

お礼を述べて、外に出る。「地域の代表選手」。「恥ずかしくないようなおもてなし」。ひとつひとつの言葉が、心に残る。

三つ目は「洋食の駅」に行ってみよう。朝倉市から筑前町に入るとすぐ、白い三角屋根の建物に黄色い

のぼりが見えてきた。洋食の駅「自然工房レストラン南」である。ここはその名のとおりに、自然の素材にこだわった料理を楽しむことができるレストランだ。しかし入口には池がこしらえてあり、中に入っすぐ、レジの前にもメダカがいる水槽やベンチなどがあって、食事の客以外でもちょっとした休憩をとることができる。また店内は至る所に自然の流木やかずらなどを使った飾りつけがなされていて、暖かい雰囲気包まれている。

これらはすべてこのレストランのシェフであり、「駅長」である南隆晴さんの手づくり。アウトドア派の南さん。休みの日は趣味の溪流釣りの傍ら山で材料を集めてきては、それに細工をほどこして、少しずつ店内を飾りつけている。

手先が器用な彼は、紙切り細工の名人でもある。光沢の黒紙にハサミを入れたかと思うと、あっという間にカブトムシやクワガタ、はては小さなアリやハエまでも次から次に生み出していく。「まるで魔法みたい」。子どもたちは大喜びだ。てんてこ舞いの食事時はさすがに無理だが、少しでも時間ができると南さん、にこにこしながら厨房から出てきてくれて、その技を披露してくれる。

自然が大好きな南さんに、まちの駅をはじめたわけを尋ねてみる。

「わたしはよそから通いながらこの町でレストランをさせてもらっています。だからこの町に少しでもとけ込みたくて、まちの駅ののぼりを立てました。今、この町を案内できるように猛勉強中です」。

はにかんだ笑顔から、心地よい風が吹いてくるような気がした。

最後に、甘木・朝倉まちの駅の仕掛け人、上野さんを訪ねる。彼のいる朝倉市観光協会は、第三セクターである甘木鉄道の終着駅、甘木駅の構内にある観光案内所。そこもちろんまちの駅「ほとめきの駅」だ（「ほとめき」とはこの地方の方言で、「おもてなし」の意）。上野さん、外でなにやら大工仕事をやっている。パンフレットなどを入れる情報ラックをつくっている。これは新しくまちの駅になったところに置いてもらうものだが、予算がないので、暇を見つけて（といっても彼には本当に暇な時間なんてないのだが）ひとつひとつ手作りでつくっているらしい。上野さん、浅黒く日焼けした笑顔でこう語った。

「金がないなら知恵を出せ、知恵がないなら汗をかけ」。

（京都大学大学院公共政策教育部・福岡県職員）